

<研究ノート>

入れ子型言語紛争：同質規範と異質規範の拮抗

松尾雅嗣

広島大学平和科学研究センター

< **Research Note** >

**Nested Language Conflict:
Assimilation vs Differentiation**

Masatsugu MATSUO

Institute for Peace Science, Hiroshima University

SUMMARY

In many multilingual societies and states, the dominant ethnic group(s) often attempt to assimilate linguistically ethnic and/or linguistic minorities. On the other hands, ethnolinguistic minorities in such a situation try to differentiate themselves from the dominant group(s) on the basis of the difference in language and other properties. This opposition between assimilation and differentiation, or homogenization and heterogenization is present in most of the ethnic and/or ethnolinguistic conflicts. It is, however, most clearly seen in nested conflicts discussed in the present paper. Nested ethnic conflicts involve three ethnic groups layered hierarchically in both power and territory. The first party is the greatest of all both in power and territory.

The second is contained territorially within the scope of the first, and intermediate in power and territory. The third is the smallest in territory and power and is completely embedded territorially within the second, and hence the first. In a nested conflict, two principles or doctrines of assimilation and differentiation are often found to be working in a very opposite way. Usually, the largest and strongest party imposes the dominant language upon the second (and the third). While the intermediate group opposes the imposition of the dominant language, the group in turn imposes their language upon, and seeks to homogenize, the third, smallest group within their territory, especially at the time of decline or fall of the power of the largest group. The smallest group in their turn often opposes the imposition of the language of the intermediate group and sometimes seeks assistance from the largest or collaborate with the largest in opposition to the intermediate. The present paper attempts to illustrate the workings of the two principles through the examination of in the actual conflicts in the nineteenth-century Kingdom of Hungary, contemporary Georgia and Moldova.

はじめに

多くの言語紛争、ひいては民族紛争が、支配的民族＝言語集団による支配的言語の強制と、これに対する従属的民族＝言語集団の自己の言語を基盤とした抵抗、対抗という形態をとることは周知の事実とあってよからう。ここには、支配的民族＝言語集団の側における同化原理と、従属的民族＝言語集団の側における異化原理の対抗を見ることができる。前者は、「同一の民族あるいは国民は言語を共有する」という規範の顕現であり、後者は「言語を異にする集団は、異なる民族あるいは国民である」という規範の顕現である。別の個所で既に論じたように（松尾1992: 40）、このふたつの規範は、論理的には同一の命題から導くことができるものの、規範、あるいはそれから導かれる政策としては全く逆の方向をもつ。本稿は、このふたつの規範が、具体的な言語紛争の中でどのように政策や運動の目標として現れるかを幾つかの事例に即して検討することを目的とする。前者については、西欧国民国家、就中イギリス、フランスの近代における国内少数言語集団の言語的同化あるいは抑圧政策、後者については、例えば東欧少数民族の民族主義運動の事例など、一方の規範については多くの研究蓄積がある。しかしながら、ふたつの規範の対抗関係、拮抗関係については、必ずしも十分な検討が加えられているとは言い難い。本稿でふたつの規範の関係に焦点を当てる所以である。

このふたつの規範、同化と異化あるいは齊一化と異質化、が対抗的に機能していることは多くの言語紛争において容易に看取することができる。しかしながら、このふたつの規範の拮抗関係を最も明瞭に見ることができる事例のひとつが、ここで言う入れ子型紛争である。「入れ子型」という名称はともかく、民族紛争の主体がその内部にほぼ同型の紛争を抱えている事例は少なくない。旧ソ連の崩壊後、かつての連邦構成共和国内部で、あるいは自治共和国、自治州の内部で、以前のロシア人と共和国民族の対立をそのまま小規模に引き写した民族紛争が、あたかもロシア人形のマトリョーシカの如くに、噴出したことは記憶に新しい。本稿で言う入れ子型紛争は、まさにこのような紛争の謂である

入れ子型紛争には、少なくとも階層化された3つの民族＝言語集団が関わる。しかも紛争に関わる民族＝言語集団は、ひとつを除き、地理的にかつ政治的に他の集

団に包摂され、権力の面で劣位にある。例えば、仮に3つの集団があるとするならば、最上位の集団は地理的領域、権力の双方においては第2の集団（従って、第3の集団）より優位にある。例えば、旧ソ連におけるロシア人集団がそれである。第2の集団は、第1の集団が支配的である領域と政治体においては従属的であるが、自身の領域と政治体においては支配的であり、その内部に第3の集団を包摂する。旧ソ連の例で言えば、連邦構成共和国の主要民族、例えば、グルジア民族などがこれにあたる。入れ子型紛争の場合、第1の集団と第2の集団の紛争と、第2の集団と第3の集団の紛争が同時的あるいは時間的に連続して起こる。旧ソ連解体後の民族紛争の多くが後者の事例である。

この形の紛争において、中間の集団は、上述のふたつの規範を同時に推進することになる。即ち、より優位の民族言語集団に対しては、異質化の原理をもって自己の独自性を主張し、より劣位の集団に対しては、同質化の原理をもって臨む。勿論、より劣位の集団に対して、多文化主義政策や地域的自治政策をもって臨む場合、紛争の危険が少ないことは言うまでもないが、ここでは予防策、解決策については論じない。典型的な入れ子型紛争の場合、中間的な位置にある集団は、このような言わば「二正面作戦」をしばしば採用するからである。

本稿では、19世紀のハンガリー王国、現代におけるモルドバ、グルジアの3つの事例を取り上げ、入れ子型紛争におけるふたつの原理の作用を検討する。これにより、将来のより厳密な定式化に資することが本稿の目的である。

1 ハンガリー王国

19世紀以降のハンガリー王国は、同化と異化の規範が対抗した入れ子型紛争の典型的な歴史的事例のひとつである。この紛争は、図1のように図式化することができよう。

言語に関する限り、紛争の端緒は、ハプスブルク皇帝ヨゼフ2世の18世紀末のドイツ語化政策に対するハンガリー貴族の抵抗である。勿論、図1に示すように、ヨゼフ2世の政策そのものを、18世紀ヨーロッパにおけるフランス語の優位に対する対外的には異化の政策、対内的には同化の政策と見ることもできよう。プロイセン、

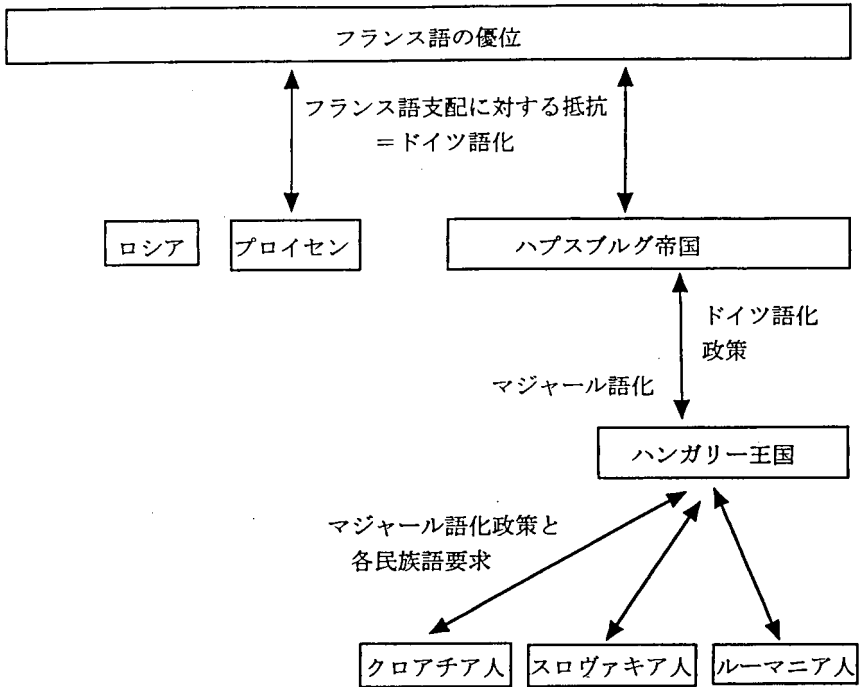


図1 入れ子型言語紛争：ハンガリー

ロシアにおいても、これと同様の動きがあったことはこの見解があながち誤りでないことの傍証となろう。この場合、入れ子は、最も単純な3層の構造ではなく、4層から成ることになる。

対抗する側のハンガリー貴族が、「言語を異にする集団は異なる民族である」という規範を奉じて、ハンガリー語（マジャール語）を全面に出してドイツ語化政策に対抗したことも周知の事実である。帝国の言語政策に対抗する形で喚起されたがゆえに、固有の言語即ちハンガリー語が民族の象徴として登場した。

1839年ハンガリー議会は、ハンガリー語を政府と教会の公用語とすることを議決する。1843年には、ハンガリー語を唯一の学校教育用語とする (Lehiste 1988: 57)。かくして、ハンガリー語は、1840年代までには、ハンガリーの公的生活の言語としてドイツ語に有効に対抗したのみならず、ラテン語をも駆逐した (オーキー 1987:

106)。人口のほぼ半分を占めるに過ぎないハンガリー人のこのようなマジャーリ化政策にハンガリー王国内のスロヴァキア、クロアチア、ルーマニア諸民族が反発したのは言うまでもない。ハンガリーの政策は、対外的にはハンガリー語による異化政策であったと同時に、対内的には、ハンガリー語による同化政策であったからである。ハンガリーの対ハプスブルク紛争と並行して、他方ではハンガリー全体での公用語としてハンガリー語を使用することをめぐって、クロアチア人、セルビア人、ルーマニア人、スロヴァキア人の抵抗もこれに対抗する形で発生していた（オーキー 1987: 112）。1830年代以降、ハンガリー内の少数民族の間に、「反ハンガリー化」をバネとした民族意識が成長してくる（羽場 1989: 219）とされる所以でもある。しかも、マジャーリ化が、ハンガリー語化（マジャーリ語化）を柱としていたがゆえ、反ハンガリー化も、1840年代以降のクロアチア人の対応の例に見るように、言語を全面に出したものとなったのである（Inglehart and Woodward 1972: 369）。それはチェコの初代大統領マサリクをして、「民族問題は言語問題に限らない。それは同時に経済と社会の問題である」と警告を発せしめたほどであった（ibid 370）。ここに言語的同化と異化の規範が並存した対立する事例を見ることができる。

この間1848年には、「諸国民の春」と呼ばれるの革命的雰囲気の中で、反ハプスブルク革命、即ちハンガリー革命が起るが、このときセルビア人、トランシルヴァニアのルーマニア人、クロアチア人は、当初ハンガリー革命を支持して、言語使用権、信教の自由、農奴解放の徹底を要求した。しかしハンガリー革命政府は、これに対し、国民国家としての統一と公用語としてのハンガリー語の使用をもって答えた。その結果、諸民族はハンガリー革命から離反し、ウィーン皇帝側の反ハンガリー革命軍に組織されていった（羽場 1989: 219）。これは、「非歴史的民族」の反革命的裏切としてエンゲルスを激怒させたものであった（Parkinson 1977: 134）。入れ子における3位以下の集団がふたつの上の集団と協力、庇護関係を結ぶことによって直接上位にある集団との関係を有利にすることを企てるのもしばしば見られる現象である。

1866年ハプスブルグ帝国はプロイセンとの戦争に敗れ、翌1867年、ハプスブルグ帝国はハンガリー王国に大幅な自治を認め、オーストリアとハンガリーの二重帝国となった。世に言うアウスグライヒである。アウスグライヒにより、王国内の自治

権を獲得したことにより、マジャー化政策はさらに徹底されたが、この後の強権的なマジャー化政策については本稿の範囲をこえる。

2 モルドバ

ハンガリー王国における強権的な言語的斉一化は、支配的集団の斉一化に対抗する従属的集団が他方で独自性を主張しつつ対内的には内部の少数集団に斉一化を強制し、それに対し内部的従属集団が言語的独自性を主張するという入れ子型に階層化された民族＝言語紛争の連鎖の歴史的事例と言える。

ここでは、言語の問題の占める位置に関する情報が必ずしも正確、豊富とは言えないにせよ、これに類似した近年における「入れ子型」即ち多重階層化状況の事例をふたつ上げておく。まず、モルドバ共和国の事例を検討する。

ソ連への併合、連邦構成共和国の成立後のモルドバにおいて、ソ連政府がまず採用したのは、異質化政策であった。国名をモルダヴィアに変え、共和国内で話される多数派言語であるルーマニア語を同様にモルダヴィア語と称した。表記もルーマニア語のラテン文字からキリル文字に代えた。多くの言語学者がモルダヴィア語が如何にルーマニア語と異なる言語であるかを「実証」するために動員されたと言う。これらはすべて、モルドバ人が、ルーマニア人でないことを明証するためであった。モルドバ人は、多くの民族運動の場合と異なり、自発的ではなく、他者の力によって異化されたのである。しかしながら、この異化政策は、対内的には強力な同化政策を伴っていた。

モルドバにおけるキリル文字の強制は、それに伴って学校でのルーマニア語教育の衰退と、共和国行政からのルーマニア語の抹殺をもたらした。その結果、見かけの母語維持率は91.6%と高いが、ロシア語化が進展した。ここでは、支配的ロシア民族＝言語集団対従属的モルドバ民族＝言語集団という図式のみを指摘しておけば十分であろう。またこれは、他方で、民族という区分に従った政治化を促進するような、文化的分業と対応する。ロシア人移住者が、大多数の特権的な職業、就中生産と行政において支配的地位を占めているからである (Smith 1989: 229)。

ソ連のモルドバ政策は、上述のような言語の名目的造成により、モルドバのルー

マニアとは異なる独自性を強調すると同時に、モルドバ自身の主体性は認めないものであった (Eyal 1990: 127-128)。モスクワは、一方ではルーマニアとの関係を立つためにモルドバを異化し、他方ではモルドバの独自性を抑圧する同化政策を取ったのである (Eyal 1990: 128)。

ソ連中央のモルドバ民族政策の核心が言語政策であったことからして、ゴルバチョフ以後のモルドバ民族運動では、言語問題が最大の争点となったのは必然とも言える。言語政策が、ソヴィエト政策の核心であったからである (Eyal 1990: 131)。ルーマニア語を公用語とすること、ラテン文字で表記すること、ルーマニア語とモルドヴィア語は同一の言語であると認めること (Eyal 1990: 132) という要求がモルドバ人から提起されたのは当然の帰結である。

このような異質化の主張と同時に、政治権力を掌握したモルドバ人は、対内的同質化の政策を推進し始める。共和国最高会議は、1988年、他民族にも居住地での民族言語の使用を認め、また人口の約40%に達する非モルドバ系のストライキによる抵抗と一部妥協しつつロシア語とともに、上記3項目の要求を満たす形でルーマニア語を公用語とする言語法を採択した。しかも、公務員は全員ルーマニア語を学び、使用することが義務付けられた。これは、共和国が彼らモルドバ人のもの、しかも彼らだけのものであり、他の民族集団は、民族ではなく、その権利を尊重すべきではあるが、多数派と対等の要求を成しえない少数派であることの認知であった (Eyal 1990: 133)。従属的地位に貶められた民族にとっての補償的優遇措置という側面が全くないわけではないにせよ、モルドバのこの政策は基本的には上述のハンガリーの政策と同じである。この法案が、対外的に異化の原理を主張し、対内的には同化の規範を強要するという入れ子の中間に位置する集団の行動様式の典型の現れであることは否定できない。そしてまたこのような動きは、バルト3国に代表される民族意識の噴出の一つの表現としての民族語の公用語化の動きの一環である。バルト3国は、1988年暮に相次いで公用語化を中心とする言語法を採択している。カザフ、ウクライナも同様である。さらに、1990年、モルドヴィア共和国は、国名をモルドバ (Moldova) 共和国とルーマニア語風に改めた

図式的に表現するならば、ロシア語による同化に対抗するモルドバの自立と異化の動きは、同時に国内少数集団に対するモルドバ語による同化と同時進行し、この

対内的な同化は、それに対抗する形で国内少数民族＝言語集団の異質化の主張を促すのである。

今日のモルドバ共和国において、モルドバ人は全体の6割を占めるに過ぎない。逆にウクライナ人、ロシア人など非モルドバ人は4割近くを占める。

モルドバ人の言語法定の動きに対抗して、ロシア人を中心としたストライキが行なわれたことは既に述べたが、国名変更と並行して1990年6月には、ロシア人の集中するチラスポリなど東部の地域ではロシア人による「自主管理」が宣言され、しかも、注目すべきことに、そのとき89年言語法の見直しの要求が提起されたことである。これは、モルドバ語による斉一化に対する異質性の主張にほかならない。

さらにモルドバは、90年6月23日主権宣言を行なった。これに対抗する形で、ガガウズ人は8月自治共和国を宣言し、ロシア人もこれに倣い10月沿ドニエストル共和国を宣言した (Eyal 1990: 137)。以後モルドバ側と少数集団の側での武力を伴う対立が続いた。

ガガウズ人について簡単に述べておくと、チュルク系のガガウズ語 (Campbell 1991: 482, Comrie 1981: 46) を使用し、今日モルドバ共和国とウクライナ共和国のオデッサ地域に約15万人の言語人口を擁する (Campbell 1991: 482)。ガガウズ語はトルコ語と近く、トルコ語の方言と看做す説もある。1957年に、キリル文字による表記が採用された (Campbell 1991: 482)。ガガウズ人の母語維持率は、93.6%と高い (Comrie 1981: 49)。大多数のガガウズ人は少なくとも名目的には、キリスト教徒である (Comrie 1981: 47)。

現在言語の問題に関する情報が乏しいものの、同質性の強要と異質性の対抗的主張という側面は、以上の短い説明からでも明らかであろう。ここでは、ロシア語、モルドバ語あるいはルーマニア語、ガガウズ語あるいはロシア語という階層的関係を容易に看取することができる。モルドバ人の自決の権利は何人も否定しえないが、ガガウズ人指導者の次の言葉は、入れ子型紛争の本質を突いたものとしても、引用の価値があろう。

「モルドバはソ連帝国からの解放を言うが、我々には、小さな共和国も帝国だ」
(朝日新聞 1991年6月13日)

以上概観したモルドバ紛争においては、ロシア民族＝言語集団 対 モルドバ（＝ルーマニア）民族＝言語集団 対 ガガウズ民族＝言語集団および（モルドバ国内の）ロシア民族＝言語集団という階層的な対立図式はきわめて明瞭であり、かつまた、言語的要因は比較的はっきりしている。

3 グルジア

これに対して、グルジアの場合は、言語的要因の関与の度合いに関してはほとんど情報がないと言ってよいのが現状である。しかし、民族間の紛争ははるかに暴力的な様相を呈しており、犠牲者の数も多い。しかもグルジアの場合、言語の問題だけでなく、宗教や領土や過去の殺戮といった多様な要因が錯綜している。

ここでは、グルジアの言語問題に対象を限定して論ずる。まず、ソビエト体制下におけるグルジア語とロシア語の関係について述べ、その後、グルジア内の少数集団、オセット人、アブハズ人の問題を取り上げる。

グルジア人は、宗教においても言語においてもきわめて長い歴史と文明を誇る (Parsons 1990: 180)。グルジア語はコーカサス系の言語であり (Hewitt 1985: 163)、既に5世紀の初めには、文字が使用されていたと言われる (Hewitt 1985: 164)。グルジア人のロシア人との対立を論ずるとすれば、少なくともロシア革命まで歴史を遡らなければならないであろうが、ここではこの点は割愛して、比較的近年における対立を、しかも言語の問題に限定して回顧しておく。

グルジア共和国の現大統領シュワルナゼが共和国の党第一書記であった1975年、学位論文のロシア語での執筆を義務化し、これに対して抗議の声が上がるという事件が起こっている。さらに、1978年には、有名な憲法改正事件、即ちグルジア語を唯一の公用語からはずそうとしたことに反対する運動があった。反対する数千人のデモが起こり、数百人の知識人が署名したロシア語化に反対する請願がブレジネフに送られた。(Duncan 1990: 157, Parsons 1990: 186)

1987年末、19世紀の民族解放運動指導者の名を冠したイリア・チャフチャヴァーヴェ協会が結成され、他の民族的要求とともに、グルジア語の共和国公用語化、グルジア語、グルジアの歴史、地理教育の強調を要求した (Parsons 1990: 188-189)。

89年4月には、グルジアのソ連からの離脱を要求する市民と治安軍が衝突して流血事件となった。トビリシ事件である。これは、元来アブハジアの分離要求に反対する反アブハジアの抗議行動であったが、大衆的な独立要求デモに発展した (Parsons 1990: 191)。一方でソ連に対抗し、他方で国内のアブハジアに対抗するというこの事件は、既に入れ子型紛争の様相が濃い。しかも、後述のようにこの時のアブハジア問題の争点のひとつは言語であった。

ソビエト体制下のグルジアは反ロシア、反モスクワによって特徴付けることができると言えるが、他方で、共和国内少数言語集団との関係も無視できない。対外的な反ロシア、反モスクワ政策は、しばしば対内的なグルジア至上主義と対になっているからである。上述のトビリシ事件が反アブハジア行動から、容易に反モスクワの独立要求に転化したのもその例である。歴史的な事例をひとつ上げれば、革命後独立を宣言したグルジア・メンシェヴィキ政権は、アブハズ人、アジャール人 (グルジア人ムスリム)、オセット人に対して、「オセット人を打ち破って殺し尽くし、アブハジアではあらゆる村々を焼はらい、…」と批判されるほどに少数集団に対して強圧的なものであった (北川 1990: 127-128)。

以下、ここでは、オセット人とアブハズ人の問題に手短かに触れておく。少数言語集団としては、グルジア内のアゼルバイジャン人の問題もあるが (Parsons 1990: 190)、ここでは割愛する。

最も深刻な武力紛争が発生したのは、南オセチア自治州である。オセット人は、北オセチア自治共和国と南オセチア自治州に居住しており、人口は1970年には約49万人であるが、そのうち88.6%がオセチア語を母語と看做している (Comrie 1981: 164)。人口は、1979年、541,893人。うち、299,022人が北オセチア自治共和国に居住、65,077人が南オセチア自治州に居住する。南オセチア自治州居住のオセット人はキリスト教徒である (Bennigsen and Wimbush 1985: 205-206)。オセチア語は、イラン語系に属する (Campbell 1991: 1069, Comrie 1981: 161) が、オセット人は、グルジア語に同化する強い傾向を示している (Anderson and Silver 1990: 120)。

89年8月にグルジア政府がグルジア語の公用語化を同自治州に押しつけたことが発端になり、両民族の対立が生じた。90年11月、自治州政府は同州を南オセチア民主共和国とする旨の宣言を採択した。これに対し、90年12月にグルジア政府は同州

の廃止を一方的に宣言し、非常事態令を導入した。以後、内戦状態が続き、グルジア側は経済封鎖などの強行手段に出て、以後、犠牲者や多くの難民を出した。難民は、4千人とも1万5千人とも言われる。南オセチアの紛争とモルドバの紛争に大きな共通性を見ることは容易であろう。言語的同化の強制とそれに対抗する従属的集団の言語的独自性の主張の拮抗は明らかである。

ただ、グルジアの場合、事態を紛糾させているのは、少数民族の要求を、モスクワに教唆され、グルジア独立闘争から民衆の関心をそらす意図をもつものと一蹴する傾向が強いことである。確かにモスクワが民族対立を煽ることなしとしないし (Parsons 1990: 192), あわせて20万人のソ連兵がグルジア内にいたと言われており、安全保障要因もあることは否定できない。そして、ハンガリーの事例に見られるように最下位の集団が往々にして最上位の集団の援助や支援や庇護を要請すること、最上位の集団が敵対する集団に対抗するために最下位の集団を利用することも事実であり、最下位の「自治州の指導部はグルジアの独立をつぶそうとするクレムリンの代理人だ」などという言葉に一面の真理が含まれていることも確かである。しかしながら、グルジア古来の領土であるとして、アブハジアや南オセチアの独立性を拒否する態度に見られるように (Parsons 1990: 195 note 46), ハプスブルク帝国の反革命的策動として少数民族の要求を拒否した1848年のハンガリー革命政府と同じ態度がここに見られるのも事実である。

グルジアにおけるもうひとつの紛争であるアブハジア紛争についても南オセチアと同じ現象を見ることができる。

アブハズ語はコーカサス系言語に属するが、グルジア語とは大いに異なる (Benignsen and Wimbush 1985: 214)。1979年には、アブハズ人は約9万人で、その95%がアブハズ語を母語とする。大多数がアブハジア自治共和国に居住する (Campbell 1991: 2)。とはいえ、アブハズ人は、アブハジア自治共和国においても少数派でしかない。

1953年グルジア少数民族政策に大きな転換が行なわれ、教育制度が改革されて新しいアブハズ語学校が立てられ、新聞が創刊された。また、首都スフーミの師範学校にはアブハズ語アブハズ文学部門が設立された。1954年字母もキリル文字にもとづくものに変更された (北川 1990: 135)。

スフーミでは、1981年に政府のアブハズ人閣僚枠増加を要求するデモが起こった。スフーミ師範大学はアブハズ人の高等教育の要求を満たすために国立アブハジア大学に昇格した。そしてこの大学におけるアブハズ化の進行の結果、グルジア人のための大学としてトビリシ大学分校が必要となった。アブハズ人がこれに反対したのは、アブハジアはアブハズ人の国であるという主張からであろう（北川 1990: 136）。

1988年後半になると、アブハジア自治共和国におけるグルジア人差別に対する抗議の声が出はじめた（Parsons 1990: 190）。1989年のスフーミ事件は、スフーミにグルジア語で教育を行なうためにトビリシ大学の分校を設置することに抗議したアブハズ人がグルジア人を襲撃したことから始まり、最終的に死者19名、負傷者数百名を出した。内務省は治安部隊を派遣した。アブハズ人の運動をグルジア人は「クレムリンはグルジアの独立運動を抑えるために、アブハジア・カードを使った」と表現している。これが、前述のトビリシ事件に発展したのである。

アブハジアの場合、紛争の実態からして、3層の構造というより、ロシア人（ソ連）－グルジア人－アブハズ人－アブハジア共和国のグルジア人という4層の構造を考えるべきかもしれない。いずれにせよ、ここにも明らかな入れ子型の構造を見ることができる。

しかし、南オセチアの場合と異なり、アブハズ人はアブハジア自治共和国においてさえも人口の17%にすぎない。にもかかわらず、党、政府、経済の要職を支配しているという事実もある。他方で、グルジア人が、アブハジアもそしてアブハズ人自体も、伝統的グルジアに属すると考え（Diuk and Karatnycky 1990b: 152）、アブハズ人の運動をロシア人のグルジア抑圧の一環と看做しがちであることも否定できない。

結び

僅か3つの事例を検討したにすぎないが、本稿における検討から、入れ子型と称すべき言語紛争の存在は明らかである。このことは、単に言語紛争のみならず、民族紛争一般の研究においても、一般的に行われているふたつの集団の対立抗争という

枠組では捉らえきれない紛争が存在することを意味する。入れ子型の如く階層化された場合も含めて、3つ以上の紛争当事者が関わる紛争という分析枠組を定式化する必要があることは明らかであろう。

また、入れ子型言語紛争において、同化規範と異化規範というふたつの相反する規範が並存し、対抗することも検討した事例から明らかであろう。個々の言語紛争や民族紛争の分析において、同化規範と異化規範の対抗の力学が論じられてきたが、理論的に明確な定式化は十分に成されているとは言い難い。これも今後の検討課題のひとつである。

引用文献

- Anderson, Barbara A. and Brian D. Silver (1990), "Some Factors in the Linguistic and Ethnic Russification of Soviet Nationalities: Is Everyone Becoming Russian?" Hajda and Bessinger (eds) (1990), 95-130
- 有賀貞他 (編) (1989), 『講座国際政治 3: 現代世界の分離と統合』, 東京: 東京大学出版会
- Bennigsen, Alexander and S. Enders Wimbush (1985), *Muslims of the Soviet Empire: A Guide*, London: Hurst
- Comrie, Bernard (1981), *The Languages of the Soviet Union*, Cambridge: Cambridge University Press
- Campbell, George L. (1991), *A Compendium of the World's Languages*, 2 vols., London: Routledge
- Diuk, Nadia and Adrian Karatnycky (1990), *The Hidden Nations: The People Challenge the Soviet Union*, New York: William Morrow
- Duncan, Peter (1990), "The USSR," Watson(ed) (1990), 152-165
- Eyal, Jonathan (1990), "Moldavians," Smith(ed) (1990), 123-141
- 羽場久凜子 (1989) 「東欧-独立以前の東欧における多民族共存と地域統合の模索-」, 有賀貞他 (編) (1989), 215-237
- Hajda, Lubomyr and Mark Bessinger (1990), *The Nationalities Factor in Soviet Politics and Society*, Boulder: Westview Press
- Hewitt, George B. (1985), "Georgian: A Noble Past, A Secure Future," Kreindler (ed) (1985), 163-179
- Inglehart, Ronald F. and Margaret Woodward (1967) "Language Conflicts and Political Community," *Comparative Studies in Society and History*, 10(1), 27-45
- 北川誠一 (1990) 「ザカフコース・200年の民族間抗争」, 山内昌之他 (1990) 「分裂するソ連: なぜ民族の反乱が起こったか」, 東京: 日本放送出版協会, 113-153
- Kreindler, Isabelle T. (ed) (1985), *Sociolinguistic Perspectives on Soviet National Languages: Their Past, Present and Future*, Berlin: Mouton de Gruyter

- Lehiste, Ilse (1988), *Lectures on Language Contact*, Cambridge, MA: MIT Press
- 松尾雅嗣 (1992) 「言語と民族に関するふたつの命題」, 『広島平和科学』, 15, 27-52
- オーキー, R (1987) 『東欧現代史』, 東京: 勁草書房
- Parkinson, F. (1977), *The Philosophy of International Relations: A Study in the History of Thought*, Beverly Hills: Sage
- Parsons, Robert (1990), "Georgians," Smith (ed) (1990), 180-196
- Smith, Graham (1989), "Administering Ethnoregional Stability: The Soviet State and the Nationalities Question," Williams and Kofman (eds) (1989), 224-251
- Smith, Graham (ed) (1990), *The Nationalities Question in the Soviet Union*, London: Longman
- Watson, Michael (ed) (1990), *Contemporary Minority Nationalism*, London: Routledge
- Williams, Colin H. and Eleonore Kofman (eds) (1989), *Community, Conflict, Partition and Nationalism*, London: Routledge